

速記130年記念シンポジウム

【講談落語速記本の興隆と大阪】

2012年10月13日（土）午後2時～5時

堂島リバーフォーラム

大阪芸術大学ほたるまちキャンパス（大阪市福島区福島1丁目）

主催：速記130年記念シンポジウム大阪実行委員会

（公益社団法人日本速記協会、同協会大阪・京都・阪神・和歌山各ブロック、大阪速記士会、近畿速記士連盟、速記科学研究会、速記・言語科学研究会、速記懇談会）

協賛：株式会社ワードワープ

後援：公益財団法人関西・大阪21世紀協会、公益財団法人文字・活字文化推進機構

~~~~~

### 【第一部 記念講談】

演目「越の海勇蔵」

旭堂 南陵

速記 大堀 吉治

RTキャプショナー 安達 晴美  
スコーピスト 楠本 和宏

### 【第二部 記念講演】

- 1 「大阪の講談速記本の研究」 旭堂 南陵（大阪芸術大学）
- 2 「速記本の出現前後」 関山真理子（明治大学）
- 3 「速記本と大阪の速記人」 三牧 勉（日本速記協会）

○司会（小原 勉） 皆様、ようこそいらっしゃいました。日本の速記は今から 130 年前、明治 15 年 10 月 28 日に最初の講習会の開講式を開きました。それ以来、この日を「速記記念日」に決めて、毎年さまざまな行事を行っております。

本日は、講談師の旭堂南陵師匠から特別協力をいただき、標題のようなタイトルでシンポジウムを催すことができました。

また、開催に当たり、公益財団法人関西・大阪 21 世紀協会並びに公益財団法人文字・活字文化推進機構のご後援をいただき、また公益社団法人日本速記協会、同協会大阪ブロック、速記科学研究会、速記懇談会などの支援をいただいで、このように盛大に開催できることになりました。

ただいまから、速記 130 年記念シンポジウム「講談落語速記本の興隆と大阪」を始めます。開会に当たり、実行委員長の兼子から御挨拶を申し上げます。

○実行委員長（兼子次生） シンポジウムの実行委員長の兼子でございます。本日は大勢の皆さんにお集まりいただきまして、厚くお礼申し上げます。

振り返ってみますと、最初の速記は手書きの符号速記でした。その後、録音速記やワープロ速記、パソコン速記、さらには近年の音声認識技術の登場など、多様化してまいりました。

本日は、最初に南陵師匠の講談を、128 年前に行われたと同じように手書き速記によって書き取った後、シンポジウムの終了時点には電子書籍として公益社団法人日本速記協会のホームページにアップロードする試みを計画いたしました。また、テレビ字幕を入れるリアルタイム反訳型の電子機械速記「はやとくん」による生字幕もごらんに入りたいと思います。

伝統の手書き速記と未来型の電子機械速記をどうぞごらんください。速記は絶えず進化し、多様化して、新しいニーズに応えようとしております。

それでは、南陵師匠の講談をお楽しみください。

~~~~~

【第一部 記念講談】

「越の海勇蔵」

旭堂 南陵

寛政時代に、前頭筆頭を務める柏戸総五郎という人が越後の新潟へ巡業に参りました。

このときに土地の料理屋、東屋金兵衛、これは世話になっているひいきの旦那でございます。この人から、背は低いが、力ほうんとあるから弟子にしてやってくれと頼まれましたのが、今年十七になる若者で勇蔵と申します。背が五尺あるなしと申しますから、ただいまでも百五十センチあるなしといううちっちゃい体でございます。

柏戸が腹の中で、「エエイ、こんなチンチクリン、相撲取りになれるかい」と思うたが、ひいきの旦那に頼まれたことです、仕方がございません。渋々弟子にいたしまして、旦那の手前、越の海という四股名もつけてやりました。

「やいやい、柏山よ」

「へい、師匠さん」

「柏海よ」

「へい、ここにおりますので」

「柏野よ」

「へい、何でございます」

「柏餅よ」

柏餅という相撲取りがいてる。

「おら、どう考えてもな、あんなチンチクリンを江戸へ連れて帰れるか、江戸の相撲衆の物笑いの種じゃ。というて、ここで追い返したら東屋の旦那さんに申しわけが立たん。そこで、わいらはな、この越後を巡業している間、野郎を使うて使うて使い回すんじゃ。ああア、相撲の修業とはこれほどえらいもんか、これほどえらいもんやったら、もうあきらめて村へ帰ろうと、こういう気を起こさすんじゃ」

「へい、師匠さん、わかりましてございますので」

さあ、これから兄弟子連中が、勇蔵、勇蔵、勇蔵と、使い回しましたけれども、当人は相撲取りになりたい一心でございます。

「はい、兄弟子」「はい、兄弟子」

喜んで働く。

いよいよ巡業を切り上げて、江戸へと帰る日になって。

「師匠さん、あきまへんわい。野郎、喜んで働きますで」

「こいつらどじなガキじゃ。でける用事をさすから働くんじゃ。今から江戸へ帰るということになって、何ちゅうこと言うんじゃ。でけん用事を言わんかい。無理を言わんかい」

「へい、師匠さん、わかりましてございます」

「おい、勇蔵、ここに明荷が八つあるやろ。この明荷八つ持って江戸までついてこい」

「兄弟子、こんな大きな明荷、肩に持つのが精一杯でございます。まあまあ両手に持って、そして前

と後ろに振り分けて四つでございます。八つもどないして持ちますんで」

「それをするのが相撲の修業じゃい。それができんようならな、とつとあきらめて村へ帰れ」

「兄弟子、それだけは言うてくださいますな。わしゃ、石にかじりついても相撲取りになろう思うて東屋の旦那さんに頼み込んだんで」

「ほんなら持たんかい」

「無理言いよるなあ、こんな大きな——ええ考えがあるわい」

何を思いましたか、勇蔵、材木屋へ参りますと、長い丸太棒を一本買うてきよった。

前のほうに四つ、後ろのほうに四つくりつけると、間へ肩を入れて、

「ウンとコラ、どっこいしょ。

へっへえ、兄弟子、持ちましたで」

「えらいこっちゃがな、おい、こんな手があるとは知らなんだがな。しゃあない。ついてこい、ついてこい」

さあ、ただいまでも一人、相撲取りが歩いておっても、皆、振り返ったりいたします。これが八人ぞろぞろと歩いているんですから

「おい、えっ、やっぱり相撲取りちゅうのはええ体してますな、ほんにええ体してますなあ」

「ええ、あの大きな力士の後でちっちゃいやつが大きな明荷八つも持たされて、かわいそうですなあ」

「あら新弟子いじめですわ」

「あないにやっていじめまんねや」

「へえ、相撲取りちゅうのは、体おっきいけれども、根性のちっちゃいやつで」

さあ、これが歩いてる柏戸の耳に入りますから、柏戸は歩いていられん。

「おい、根性悪やの、いじめるやのと言われたら、恥ずかしいて歩いていられるかい。

皆、勇蔵の荷物を持ってやれ」

「へい、師匠さん」

皆、勇蔵の荷物を持って、当人は丸太棒一本で江戸までついてきよった。

これから相撲の稽古をつけてくれるかと思いのほか、やっぱりおんなじことで、朝から晩まで「勇蔵、勇蔵」と、こき使われ通し。当人が丸三年の間、辛抱いたしました、とうとう音を上げた。

「ああ、よう働かしよるなあ。朝から晩まで、勇蔵、勇蔵、勇蔵、人間やからもってるもんやけども、雑巾やったら、今ごろすり切れて何にもあるかい。そら、何ぼ働かされんのはかめへんけれどもなあ、相撲の稽古、一遍もつけてくれたことがない。東屋の旦那さんから国を出るときにもろうた雲彩（うんさい）の稽古まわしも、一遍も使わずに真っさらじゃ。土俵の横でポーっと突っ立ってたところで、「おい勇蔵、かかってこい」という声もかからんわ。はあ、やっぱり体が小そうては相撲取りになれんのかいなあ」

「おい勇蔵」

「はい、師匠さん」

「これから本所回向院へみんな連れてな、一門の連合稽古じゃ。われは残って留守番しておけ」

「あのう、師匠さん」

「何じゃな」

「体がちっちゃうては相撲取りになれませんか」

「ああ、なれんなあ。おまえのようなやつは小人島の相撲じゃ。チンチクリン相撲じゃ。せめてな、五尺七、八寸でもありゃあええもんじゃがな。ああ、なれんな、なれんな」

「はい。わし、相撲取りになれんようなら、あきらめて国へ帰ろうと思います」

「勇蔵、おまえ、今、その言葉、本気かい。はあ、そうかそうか、おまえのその言葉が出るのを待ってたんじゃ。こっちのほうから追い返したらな、東屋の旦那さんに、越後へ行ったときに何言われるかわからんでなあ。ああ、そうかそうか、その了見が出た以上はな、きょうから働かいてもええ。路銀もたっぷりとやる。ゆっくりと江戸見物してな、土産もんも、うーんとつけてやるから。ああ、ええ言葉出してくれた」

「はい。わしなあ、あきらめて国へ帰りますがな、村の衆から、おい勇蔵、おまえも江戸の相撲衆になったんじゃ、本場所の味はどうやった、横綱谷風関に一遍でも稽古をつけてもろうたことがあるのかと聞かれたって、何の土産話もございません。本所回向院というのは本場所でございます。一遍でええから、連れていってもらいたいんで」

「ワレの言うのもっともじゃな。そしたら、きょう一日だけ俺の弟子として連れていってやろう」

「あのう、東屋の旦那さんからもろうた雲彩の稽古まわしも、江戸の本場所、拝ましてやりたいんで」

「ふんどしかつぎのまねごとがしたいなら、それもよかろう。持ってこい」

「はい、師匠さん。ありがとうございますので」

「おおい、野郎ども」

「へい、師匠さん」

「きょうはこいつをおれの弟子として一日だけ連れていくんじゃ。こんなもん世間の人に見られたら恥ずかしい、こいつの周り取り囲んで、包んで持っていけ」

饅頭にあんこみたいに言われている。

本所回向院へと参りますと、

「ええか、勇蔵、見るだけやぞ」

この言葉を残して、皆仕度部屋へと入ります。

一人ぼつんと残されました勇蔵が土俵を眺めておられますと、横綱谷風が土俵へ上がりました。

この人だけは、誰の弟子、どこの弟子という区別はございません。誰かれの区別なく稽古をつけてくれるもんですから、皆、先を争うて土俵へ上がろうとしている。

「ああ、あれが横綱谷風関じゃ。大きいなあ。一遍あの大きな胸にこの頭ぶっつけて稽古つけてもらいたいもんじゃ」

こう思いますと、矢も盾もたまりません。持ってまいりました雲彩の稽古まわし。そこらにいる連中を取っ捕まえて、きゅっきゅと締めてもらおうと、こうなると、ちっちゃい体のほうが便利です。大きなとりてきの股の下、脇の下をちょいちょいとくぐると、土俵へぽっと上がったんで。

「一丁お頼み申します。一丁お頼み申しますので」

「えらい不精ながきが土俵へ上がってきたな。土俵へ上がるなり座り込むやつがあるかい。ほら、立たんかい、立たんかい」

「あのう、立ってこれだけで」

「おお、えらいちっちゃいやつが出てきよったな。よし、うんと腰を下げてやるから、おまえの頭、この胸にどんとぶつけてこい」

「一丁お願いをいたしますので」

アリヤリヤリヤ、ドーンとぶつかった。

横綱谷風ががちりと受けとめて、さあ踏ん張れよと言われたから、一世一代、この場限りと思うから、ありとあらゆる、あらん限りの力を出し、いやあっと押して出ると、名横綱と言われた谷風でさえも、じりっ、じりっ、じりっと土俵の砂を削って後へ下がる。横綱ですから、さあっと横へ倒したものの、

「ほんにええ力さらしとるな。おまえは誰の弟子や」

「はい、柏戸関の弟子になって三年になります、越の海と申します。体がちっちゃいもんですから、三年の間ちょっとも稽古をつけてくれずに、稽古土俵の横にある、あの鉄砲柱に頭ぶっつけて、一人で稽古してたんで」

「三年の間、鉄砲柱相手の一人稽古」

言うてるところへ柏戸が出てまいります。

「えろう皆さんおにぎやかなこって。皆さんおにぎやかなこって」

「柏戸関、今聞いたんじゃが、このちっちゃいのはおまえさんの弟子やそうやな」

「あっ、勇蔵、出たらあかんちゅうのに出さらしやがって。いやあ皆さん、もう笑うてくださいませ、笑うてください。もう国へ追い返すところでございますので」

「なあ、柏戸関、一遍でも稽古をつけてやったらどうじゃ」

「いやあ、こんなチンチクリン」

「いやいや、稽古をつけてやったならばな、こいつが「ああ江戸の土俵にはかなわんわい」と思うたら、さっさとあきらめていきよる。一遍も稽古つけてくれることがないという話やな、一たん引き受けた以上は、それは人の道に反するぞ。えらい失礼じゃがな、今のおまえさんの力では、この若いやつの稽古をつけ切れんぞ」

「ええっ、野郎にそれだけの力が。よおし、勇蔵、おれが稽古をつけてやるから」と、土俵へ上がりましたが、柏戸では稽古つけ切れん。ポーンと土俵の外へ飛び出した。

初めて勇蔵の力を知りました柏戸が、

「勇蔵、勘弁してくれ。おまえにそれだけの力があるとは知らなんだ。わしのほうから改めて谷風関にお願いをするから」

さあ、これから谷風のほうに願い出まして、谷風も柏戸からの預かり弟子ということで預かりました。

谷風のもとで稽古をするもんですから、どんどん力をつけてまいりました。

体もぐんぐん、ぐんぐん、ぐんぐん大きくなってまいりました。

ところが、この人、上にはちょっとも伸びません。横のほうにぐんぐん、ぐんぐん、ぐんぐん大きくなって、縦が五尺、横が五尺、真四角サイコロのような体ができ上がりまして、こうなりますと、押しても引いても倒れるもんじゃあございません。

谷風、小野川、雷電と、名力士、名横綱がそろった寛政時代に、この人は五尺足らずの体を持ちまして、関脇まで取り進みました。

本日は、『越の海勇蔵』と題す一席の講談でございました。

ありがとうございます。